

# 漢字「とめ・はね」で×の誤解 「字体」と「字形」知らない先生も

会員記事

中島鉄郎 2021年12月3日 18時00分



早稲田大学の笹原宏之教授

漢字の「とめ・はね・はらい」って、細かく気にしすぎることもないんだー文化庁が2016年に出した「常用漢字 表の字体・字形に関する指針」を読むと、そんな思いにとられる。「とめ・はね」「長:短」など多くのケースで、「指針」は「どちらでもOK」と認めているのだ。ただ、世に出て5年たっても、教育現場では厳格な「とめ・はね」指導の例が目立つという。「指針」作成の責任者の一人だった早稲田大学の笹原宏之教授に聞いた。

——「指針」を作成した文化審議会 国語分科会の漢字小委員会にかかわられました。「指針」の基

本的な考え方を教えて下さい。

「漢字『とめ・はね・はらい』指導どこまで必要？」アンケート募集中 →

## 300人が手書きしたら300通りの字形

「印刷文字の普及で、手書き文字への硬直した理解が増え、社会的な問題にもなってきました。例えば、役所の窓口で名前を届けるとき、『鈴木』の『鈴』の『令』を、『点』ではなく『縦の一』に書き直させられたり、教育現場での漢字テストの『とめ・はね』で、どちらでも誤りではないのに、『来』の縦の棒をはねていて×にされたりという例が多くあります。もう一度きちんと、手書き文字と印刷文字は異なり、細部を気にしすぎるべきではない、と周知しなければいけない、となりました。これまでの漢字政策を受け継ぎ、筆写の習慣と読みやすさや違和感について考えた結果です」

——「指針」では、「字体」と「字形」という二つの概念の違いを説明しています。

「字体とは、文字の骨組みのことです。『学』と『字』は当然ですが、異なる字です。『学』と『學』は同じ字ですが、やはり互いに字体が違うわけです。一方、字形とは字の形、デザインレベルの差異を含むものです。300人が手書きしたら300通りの字形がある。印刷文字でも明朝、ゴシックなどの書体(フォ

ント)にもそれぞれ独自の字形があります。骨組みである字体が正しければ、手書きで少し細部が違っていても、それは字形の違いにすぎず、誤りではありません。テストでも×ではありません」

——「指針」では例えば、「保険」の「保」について、印刷文字だと「口」の下は「木」になっているが、手書きの場合は「ホ」でもいい、と説明されています。これは字体ではなく、字形の違いなのですね。

「そうですね。『指針』では、常用漢字 2136文字について、手書きの場合にこんな字形もあると複数の例を示して、印刷文字とは細部が異なっても字体は同じであって誤りではない、と説明しています。とめてもはねてもいい字(例えば来)、つけても離してもいい字(文の一と义)、点の方向にいろいろな書き方がある字(魚)などが、手書きの場合、同じ字体と考えて良い、と説明されています」

——少し驚いたのは「吉」の字の上が「土」でも「士」でも、「必ずしも長短を問題としない」とされていたことです。

「『土』(つち)と『士』(さむらい)という字はもちろん字体が違う別々の字です。ただ、『荘』や『周』など、字の構成要素のひとつになっている『土』『士』という形の場合は、長短を問題にする必要はない、としています」

——何が正しいと思っているか、世代による差もあるのでしょうか。

「ええ、先ほどの『保』はいい例です。見事に年齢層で違う書き方を正答と考えています。2014年(平成26年)度の3千人を対象とした調査で『保』について調べてもらいました。口の下が『木』だけが適切な書き方と答えた人が49%なのに対し、口の下が『ホ』だけが適切とする人は33%、両方とも適切は17%でしたが、はっきり出たのが年齢差による違いでした。20～29歳の84%が『木』派で、70歳以上の70%が『ホ』派でした」

——「指針」としては、「木」でも「ホ」でもOKである、ということですね。

## 国語政策は文化庁、教育は文科省

「そうなんです。ただ、今の若い大学生たちは、『保』の口の下が『ホ』？ それは間違いでしょう、と認めないんですね。彼らは言わば『とめ・はね・はらい』を教え込まれたとおりに覚え、入学試験を突破してきたので、『どちらでもいい』という考え方をなかなか受け入れられない。字形に多様性があるという価値観を持ってないんです。そういう学生が教師になってまた厳しく教えるという悪循環があります」

——学校の先生は「指針」をあまり読んでいないのですか。

「『指針』が世間にあまねく認知されているとは言いがたいですね。小学校で漢字を教える先生でさえ、その存在を知らない人はいます」

——「指針」発表当時、文部科学大臣が国会で、「指針」によって、「学校教育における漢字指導

の考え方は変更されない」と答弁しています。厳しくするな、と厳しくしろ。国の方針が二つあるようです。

「国語政策を担うのは文化庁ですが、教育となると文科省の管轄となる。文科省は、学校教育現場で、ある程度厳しい指導が続いてきたので、突然変更すると混乱が起きると考えたのかもしれませんが。ただ、この状況で指導を変える必要はないという、かえって混乱を招いてしまいます。結局、個々の先生の厳しい、ゆるいという独自の判断で正誤が決まり、同じ書き方で○になったり×になったりする。基準がバラバラなので、入学試験などでもその1点、2点で人生を変えかねないという事態が起こるのですね」

——戦後、厳しくなったり、ゆるくなったりと、方針が変わってきたのでしょうか。

「そもそも、漢字の書き方はいろいろな時代で変化してきたのですが、日本の伝統に根ざした正しい漢字がある、という思い込みが戦後に強まりました。ただ、国語政策としては戦後、ずっと一貫して『字体が同じならば問題ない』という方針だったのです」

## 採点する人の漢字観で人生左右？

「1948(昭和23)年に『当用漢字字体表』が答申され世に出ます。そこでも、例えば、『この字ははねでも止めてもOK』という考え方が明示されている。作成の中心になった林大(はやし・おおき)先生に晩年、うかがったことがあります。その中に、手書きの例として、はねない字を例示した。はねる字も添えて書く書式がなかったただけなのに、はねない字だけが唯一正しい書き方だと誤解されて伝わるようになった、非常に不本意である、とおっしゃっていました」

——結局、採点する人が何を基準にしているかでバラバラなんですね。

「そうなってしまいます。入学試験でも学校の方針というより、担当教師の漢字観によって左右されることになるケースがまだあるようです」

「私が市民講座を担当したとき、受講者に元教諭がいました。『指針の考え方を知らなかった』『いまままで生徒に×をつけまくって申し訳ないことをした』と悔やむ方がいました。本人は正しい漢字をきちんと教えようと、善意で厳しくしているのです」

——「指針」発表から5年たっても、国語教育の現場には浸透していないのですか。

「いや、少しずつではありますが、変わってきてはいます。大学も入試では『指針』に従うようになってきていると聞きますし、各地の公立高校では教育委員会から『指針』を使って入試の採点をするように、という通達が出ています」

## おおらかに考えたほうが誰もが幸せに

「私は、教科書を発行する出版社が出す 国語辞典 と漢和辞典の編集委員になりました。そこで、指針の内容を盛り込みたい、と伝え、現場には多少の意見があったのですが、実現しました。それまでは、『木』は、縦の棒の下に赤い丸がついていて、わざわざ『はねない』と注意書きしてあったんです。これでは教員も児童も束縛され、よけいに混乱すると考え、『はねない』の赤丸を取って、はねている『木』も貼り込みました。これだけの変更でも、けっこうなエネルギーを使いますが、私も『指針』作成の担当者之一人(副主査)なので、しっかりと広めなければいけないと思ってこういうことを続けています」

——最近、保護者が ツイッター など「指針」をあげ、先生の正誤の基準に疑問を示すケースもあると聞きます。

「そうですね。漢和辞典にそう書いてあれば、テストで×をつけられた子供たちが『はねなくてもいいんですよ。ほら見て下さい』とこの辞書を先生に見せられる。百八十度の転換です。大きな考え方の変化で、無用な混乱を避けたいという声もありましたが、それを混乱と呼ぶならば、それは必要な混乱ではないか、と思います。教育界では従来の慣習を変えるのは大変ですが、もう断ち切らないといけない。今が旧弊を変えなければならない時期なのです」

「きちんとやれば答えは一つなんだ、という数学のような考え方が浸透している。でも人間の手書き文字は、いろいろ揺れ動きながら受け継がれてきたものです。定まったストライクゾーンがあるのに、わざわざ自分たちでそのゾーンを狭くしている。多様性を認める意識が高まっている現在、漢字の字形についての意識に柔軟さを取り戻し、もっとおおらかに考えたほうが誰もが幸せになる、ただそれだけなんです」(中島鉄郎)

ささはら・ひろゆき 1965年生まれ。専門は日本語学、漢字学。日本で発展した漢字についての、マンガや方言なども含めた幅広い対象の研究で知られる。常用漢字 表の選定・改定作業に携わり、2016年の「常用漢字 表の字体・字形に関する指針」作成には副主査としてかかわった。著書に「日本人と漢字」「国字の位相と展開」「日本の漢字」など。

---

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.